

新にい
美み
南なん
吉きち

月夜に七人の子どもが歩いておりました。
大きい子どもも小さい子どももまじっておりました。

月は、上から照らしておりました。子どもたちのかげは短く地べたにうつりました。

子どもたちはじぶんじぶんのかげをみて、ずいぶん大頭で、足が短いなあと思いました。

そこで、おかしくなつて、笑い出す子もありませんでした。あまりかつこうがよくないので二三歩はしつてみる子もありました。

こんな月夜には、子どもたちは何か夢ゆめみたいなことを考えがちでありました。

子どもたちは小さい村から、半里はんりばかりはなれた本郷ほんごうへ、夜のお祭りをみにゆくところでした。

切通しをのぼると、かそかな春の夜風につて、ひゆうひやりやりやと笛ふえの音ねが聞えてきました。

子どもたちの足はしぜんにはやくなりました。するとひとりの子どもがおくれてしまいました。

「文六ぶんろくちゃん、早くこい」
とほかの子どもがよびました。

文六ちゃんは月の光でも、やせっぽちで、色の白い、めだま眼玉の大きいことのわかる子どもです。できるだけいそいでみんなに追いつこうとしました。

「んでもおれ、おっ母ちゃんの下駄げただもん」と、とうとう鼻をならしました。なるほど細長いあしのさきには大きな、おとなの下駄がはかれていました。

二

ほんごう本郷にはいるとまもなく、道ばたに下駄屋さんがあります。

子どもたちはその店にはいつてゆきました。文六ちゃんの下駄を買うのです。文六ちゃんのお母さんにたのまれたのです。

「あののい、おばさん」

と、よしのりくん義則君が口をとがらして下駄屋のおばさんにいいました。

「こいつのい、たるや樽屋の清させいの子どもだけどのい、下駄げたを一足やつとくれや。あとから、おっ母さんがぜに銭もつてくるげなで」

みんなは、樽屋の清さの子どもがよくみえるように、まえへおしだしました。それは文六ぶんろくちゃんでした。文六ちゃんは二つばかりまばたきしてつつ立っていました。

おばさんは笑い出して、下駄をたな棚からおろしてくれました。

どの下駄が足によくあうかは、足にあててみなければわかりません。よしのりくん義則君が、お父さんかなんぞのように、文六ちゃんの足に下駄をあてがってくれました。何しろ文六ちゃんは、ひとりきりの子どもで、あま甘えん坊ぼうでした。

ちようど文六ちゃんが、新しい下駄をはいたときに、腰こしのまがったおばあさんが下駄屋さんにはいつてきました。そしておばあさんはふとこんなことをいうのでした。

「やれやれ、どこの子だか知らんが、晩ばんげに新しい下駄をおろすと狐きつねがつくというだに」
子どもたちはびっくりしておばあさんの顔を見ました。

「嘘うそだい、そんなこと」
とやがて義則君がいました。

「迷信めいしんだ」
とほかのひとりがいました。

それでも子どもたちの顔には何か心配な色が見えただよっていました。

「ようし、そいじゃ、おばさんがまじないしてやろう」

と、下駄屋げたやのおばさんが口軽くちがるくいいました。

おばさんは、マッチを一本するまねして、文六ろくちゃんの新しい下駄のうらに、ちよつとさわりました。

「さあ、これでよし。これでもう、狐きつねも狸たぬきもつきやしん」

そこで子どもたちは下駄屋さんを出ました。

三

子どもたちは綿菓子わたがしをたべながら、稚児ちごさんが二つの扇あふぎを、眼めにもとまらぬはやさでまわしながら、舞台ぶたいの上で舞まうのをみていました。その稚児ちごさんは、おしろいをぬりこくって顔をいどつっているけれど、よくみると、お多福たふく湯ゆ

のトネ子でありましたので、
「あれ、トネ子だよ、ふふ」
とささやきあったりしました。

稚児さんを見てゐるのにあくど、くらいところに
いって、鼠^{ねずみ}花^{はな}火^びをはじかせたり、かんしゃく
玉^{いしがき}を石垣^{いしがき}にぶついたりしました。

舞台^{ぶたい}を照らすあかるい電燈には、虫がいっぱ
いきて、そのまわりをめぐっていました。みる
と、舞台の正面のひさしのすぐ下に、大きな、
あか土色の蛾^ががぴったりはりついていました。

山車^{だし}の鼻先のせまいところで、人形の三番^{さんば}雙^{そう}
がおどりはじめるころは、すこし、お宮の境内^{けいだい}
の人も少なくなつたようでした。花火や、ゴム
風船の音もへつたようでした。

子どもたちは山車の鼻の下にならんで、あお
むいて、人形の顔を見ていました。

人形はおとなも子どもともつかぬ顔をして
います。その黒い眼^めは生きているとしか思えま
せん。ときどき、またたきするのは、人形をお
どらす人がうしろで糸をひくのです。子どもた

ちはそんなことはよく知っています。しかし、
人形がまたたきすると、子どもたちは、なんだ
か、ものがなしのような、ぶきみなような気が
します。

するととつぜん、パクツと人形が口をあきペ
ロツと舌^{した}を出し、あつというまに、もとのよう
に口をとじてしまいました。まっかな口の中で
した。

これも、うしろで糸をひく人がやったことで
す。子どもたちはよく知っています。ひる
まなら、子どもたちはおもしろがつて、ゲラゲ
ラ笑うのです。

けれど子どもたちは、いまは笑いませんでし
た。ちようちんの光の中で、——かげの多い光
の中で、まるで生きている人間のよう、まば
たきしたり、ペロツと舌を出したりする人形：
：なんとというぶきみなものでしょう。

——子どもたちは思い出しました、文六ちゃんぶんろくの新しい下駄げたのことを。晩ばんげに新しい下駄をおろすものは狐きつねにつかれるといったあの皆さんのことを。

子どもたちは、じぶんたちが、ながく遊びすぎたことにも気がつきました。じぶんたちにはこれから帰ってゆかねばならない、半里はんりの、野中の道があつたことにも気がつきました。

四

かえりも月夜でありました。

しかし、かえりの月夜は、なんとなくつまらないものです。子どもたちは、だまって——ちようどひとりひとりが、じぶんのところの中をのぞいてでもいるように、だまって歩いていました。

切通し坂の上にきたとき、ひとりの子が、もうひとりの子の耳に口をよせて何かささやきました。するとささやかれた子は別の子のそばにいつて何かささやきました。その子はまた別の子にささやきました。——こうして、文六ちゃんのほか、子どもたちは何か一つのことを、耳から耳へいつたえしました。

それはこういうことだったので、「下駄屋さんのおばさんは文六ちゃんの下駄に、ほんとうにマッチをすっておまじないをしやしんだつた。まねごとをしただけだつた。」

それから子どもたちはまたひっそり歩いてゆきました。ひっそりしているとき子どもたちは考えておりました。

——狐きつねにつかれるというのはどんなことかしらん。文六ちゃんぶんろくの中に狐がはいることだろうか。文六ちゃんの姿すがたや形はそのままできて、

心は狐になつてしまふことだろうか。そうすると、いまもう、文六ちゃんは狐につかれていますかもしれないわけだ。文六ちゃんはだまつているからわからないが、心の中はもう狐になつてしまつているかもしれないわけだ。

おなじ月夜で、おなじ野中の道では、だれでもおなじようなことを考えるものです。そこでみんなの足はしぜんにはやくなりました。

ぐるりを低い桃ももの木でとりまかれた池のそばへ、道がきたときでした。子どもたちの中で、れかが、

「コン」

と小さい咳せきをしました。

ひっそりして歩いているときなので、みんなは、その小さい音でさえ、聞きおとすわけにはゆきませんでした。

そこで子どもたちは、いまの咳はだれがしたか、こっそり調べました。すると——文六ちゃんぶんろくがしたということがわかりました。

文六ちゃんがコンと咳をした！ それなら、この咳にはとくべつの意味があるのではないかと子どもたちは考えました。よく考えてみるとそれは咳せきではなかったようでした。狐きつねの鳴き声のようでした。

「コン」

とまた文六ぶんろくちゃんがいました。

文六ちゃんは狐になつてしまつたと子どもたちは思いました。わたしたちの中には狐が一匹きはいっていると、みんなはおそろしく思いました。

樽屋たるやの文六ちゃんの家は、みんなの家とはすこしはなれたところにありました。ひろい、みかん畑やちになっていいる屋敷やしきにかこわれて、一軒けんきり、谷地やちにぽつんと立っていました。子どもたちはいつも、水車のところからすこしまわりみちして、文六ちゃんを、その家の門口まで送ってやることにしていました。なぜなら、文六ちゃんせいろくは樽屋せいろくの清六せいろくさんのひとりきりのだいじな坊ちゃんぼっで、甘えん坊あまだからです。文六ちゃんのお母さんが、よく、みかんやお菓子かしをみんなにくれて、文六ちゃんと遊んでやってくれとたのみにくるからです。今晚こんばんも、お祭まつりにゆくときには、その門口まで、文六ちゃんをむかえにいつてやったのでした。

さてみんなは、とうとう、水車のところにきました。水車の横から細い道がわかれて草の中

を下へおりてゆきます。それが文六ちゃんぶんろくの家いえにゆく道です。

ところが、今夜はだれも、文六ちゃんのことをわすれてしまったかのように、送ってゆこうとするものがありません。わすれたどころではありません、文六ちゃんがこわいのです。

甘えん坊あまの文六ちゃんぼっは、それでも、いつも親切な義則君よしのりくんだけは、こちらへきてくれるだろうと思つて、うしろをむきむき、水車のかげになつてゆきました。

とうとう、だれも文六ちゃんといつしよにゆきませんでした。

さて文六ちゃんは、ひとり、月にあかるい谷地やちへおりてゆく細道をくだりはじめました。

どこかで、蛙かえるがくくみ声で鳴いていました。文六ちゃんは、ここから、じぶんの家までは、もうじきだから、だれも送ってくれなくても、

困るわけではないのです。だが、いつもは送ってくれたのです、今夜にかぎっておくつてくれないのです。

文六ちゃんは、ぼけんとしていても、もうちゃんと知っているのです、みんなが、じぶんの下駄げたのことでなんといいかわしたか、また、じぶんが咳せきをしたためにどういふことになったかを。

祭にゆくまでは、あんなに、じぶんに親切にしてくれたみんなが、じぶんが、夜新しい下駄をはいて狐きつねにとりつかれたかしのために、もうだれひとりかえりみてくれない、それが文六ちゃんにはなさけないのでした。

よしのりくく 義則君 ぶんろく なんか文六ちゃんより四年級も上だけれど親切な子で、いつもなら、文六ちゃんが寒そうにしていると、洋服の上に着ている羽織はおりをぬいでかしてくれたものでした（いなか 田舎の少年

は寒い時、洋服の上に羽織を着ています）。それなのに、今夜は、文六ちゃんが、いくら咳せきをしていても羽織をかしてやろうとはいませませんでした。

文六ちゃんの屋敷やしきの外がこいになつていて、槇まきのいけがきのところにきました。背戸口せどぐちの方の小さい木戸をあけて中にはいりながら、文六ちゃんは、じぶんの小さい影法師かげぼうしをみてふと、ある心配を感じました。

——ひよつとすると、じぶんはほんとうに狐きつねにつかれているかもしれない、ということでした。そうすると、お父さんやお母さんはじぶんをどうするだろうということでした。

お父さんが櫓屋たるやさんの組合へ行って、今晚こんばんはまだ帰らないので、文六ちゃんとお母さんはさきにやすむことになりました。

文六ちゃんは初等科三年生なのにまだお母さんといいしよにねるのです。ひとり子ごですからしかたないのです。

「さあ、お祭の話を、母ちゃんにきかしておくれ」

とお母さんは、文六ちゃんぶんろくのねまきのえりを合わせてやりながらいいました。

文六ちゃんは、学校から帰れば学校のことを、町にゆけば町のことを、映画えいがをみてくれば映画のことをお母さんにきかれるのです。文六ちゃんは話が下手ですから、ちぎれちぎれに話をします。それでもお母さんは、とてもおもしろがって、よろこんで文六ちゃんの話わをきいてくれるのでした。

「神子みこさんね、あれよくみたら、お多福湯たふくゆのトネ子だったよ」

と文六ちゃんは話しました。

お母さんは、そうかい、と行って、おもしろそうに笑って、

「それから、もうだれが出たかわからなかったかい」

とききました。

文六ちゃんはおもいだそうとするように、眼めを大きくみひらいて、じっとしていました。やがて、祭の話はやめて、こんなことをいいだしました。

「母ちゃん、夜、新しい下駄げたおろすと、狐きつねにつかれる？」

お母さんは、文六ちゃんが何をいい出したかと思つて、しばらく、あつけにとられて文六ちゃんの顔かほをみていましたが、今晚こんばん、文六ちゃん

の身の上に、おおよそどんなことが起こったか、けんとうがつかしました。

「だれがそんなことをいった？」

文六ぶんろくちゃんはむきになって、じぶんのさきの問いをくりかえしました。

「ほんと？」

「嘘うそだよ、そんなこと。むかしの人がそんなことをいっただけだよ」

「嘘だね？」

「嘘だとも」

「きつとだね」

「きつと」

しばらく文六ちゃんはだまっていた。だまっているあいだに、大きい眼玉めだまが二度ぐるりぐるりとまわりました。それからいいました。

「もし、ほんとだったらどうする？」

「どうするって、何を？」

とお母さんがききかえしました。

「もし、ぼくが、ほんとに狐きつねになっちゃったらどうする？」

お母さんは、しんからおかしいように笑いだしました。

「ね、ね、ね、」

と文六ぶんろくちゃんは、ちよつとてれくさいような顔をして、お母さんの胸むねを両手でぐんぐんおしました。

「そうさね」と、お母さんはちよつと考えていてからいいました、「そしたら、もう、家におくわけにやいかないな」

文六ちゃんは、それをきくと、さびしい顔つきをしました。

「そしたら、どこへゆく？」

「からすねやま鴉根山の方にゆけば、いまでも狐きつねがいるそ
うだから、そっちへゆくさ」

「母ちゃんや父ちゃんは どうする？」

するとお母さんは、おとなが子どもをからかうときにするように、たいへんまじめな顔で、しかつべらしく、

「父ちゃんと母ちゃんは相談をしてね、かあいい文六が、狐になってしまったから、わしたちもこの世になんのたのしみもなくなってしまったで、人間をやめて、狐になることにきめますよ」

「父ちゃんも母ちゃんも狐になる？」

「そう、ふたりで、明日あしたの晩ばんげに下駄屋げたやさんから新しい下駄を買ってきて、いっしょに狐になるね。そうして、文六ちゃんの狐をつれて鴉根の方へゆきましょう」

文六ぶんろくちゃんは大い眼めをかがやかせて、
鴉根からすねつて、西の方？

「成岩ならわから西南の方の山だよ」

「深い山？」

「松の木が生えているところだよ」

「猟師りょうしはいない？」

「猟師てつぱうつて鉄砲打てつぱうちのことかい？ 山の中だからいるかも知れんね」

「猟師が撃うちにきたら、母ちゃんどうしよう？」

「深い洞穴ほらあなの中にはいつて三人で小さくなっていればみつかからないよ」

「でも、雪が降ると餌えきがなくなるでしょう。餌をひろいに出たとき猟師の犬にみつかったらどうしよう」

「そしたら、いっしょけんめい走ってにげましょう」

「でも、父ちゃんや母ちゃんはやいでもいいけど、ぼくは子どもの狐きつねだもん、おくれてしま
うもん」

「父ちゃんと母ちゃんが両方から手をひっぱってあげるよ」

「そんなことをしてるうちに、犬がすぐうしろにきたら？」

お母さんはちよつとだまっていました。それから、ゆっくりいきました。もうしんからまじめな声でした。

「そしたら、母ちゃんは、びっこをひいてゆっくりいきましよう」

「どうして？」

「犬は母ちゃんにかみつくでしょう、そのうちにりょうし猟師がきて、母ちゃんをしばってゆくでしょう。そのあいだに、坊ぼうやお父ちゃんはにげてしまふのだよ」

ぶんろく文六ちゃんはびっくりしてお母さんの顔をまじまじとみました。

「いやだよ、母ちゃん、そんなこと。そいじゃ、母ちゃんがなしになってしまふじゃないか」

「でも、そうするよりしようがないよ、母ちゃんはびっこをひきひきゆつくりゆくよ」

「いやだったら、母ちゃん。母ちゃんがなくなるじゃないか」

「でもそうするよりしようがないよ、母ちゃんは、びっこをひきひきゆつくりゆつくり……」

「いやだったら、いやだったら、いやだったら！」

文六ちゃんはわめきたてながら、お母さんの胸むねにしがみつきました。涙なみだがどつと流れてきました。

お母さんも、ねまきのそでこっそり眼めのふちをふきました、そして文六ちゃんがねとばした、小さい枕まくらをひろって、あたまの下にあてがってやりました。

「狐」

※ 底本 新装版 新美南吉童話集
2 『おじいさんのランプ』 (2012
年 大日本図書株式会社)

※ このテキストを個人的に読む以
外の利用をされる場合には、新美
南吉記念館までご連絡くださ
い。

(TEL : 0569-26-4888)